
プリンさん物語

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンさん物語

【著者】

日野五十鈴

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

ある世界のある国のある町にある『最高の菓子店』にまつわる、あまい甘いプリンのお話。

ある世界のある国のある町に、有名なお菓子職人さんがいました。

特に彼の作るプリンはとても美味しいと、国中から何人も人が彼の店を訪れました。

農民から王族まで、老若男女を虜にするその究極の甘味の噂は国中に広まり、いつしか彼は『プリンさん』と呼ばれ、親しまれました。

そんなある日、プリンさんのお店に、お城からの使者が来店しました。

使者は言いました。

「国王陛下のために、最高のプリンを作つてくれ

プリンさんは最高の材料を揃え、最高の技術を用いて『超高級プリン』を作り上げました。

プリンさんの『超高級プリン』は、城内でもすば抜けてデジな侍女に手渡されました。

「は、早くこれを見下に届けしなくちゃ……」

そう思い、足を速めたその時でした。

侍女はドンガラガッシュアンと派手にぱすつこけ、プリンの箱を冷たく硬く値段も高い大理石の床の上に落としてしまいました。

箱の中は大惨事。

文字通り国宝級の調度品を巻き込んで、プリンを台無しにしてしまった侍女は、お城の皆に責められました。

「家宝の壺を割るだけならともかく、プリンさんが陛下のために作った至高のプリンを…ッ…！」

侍女は皆に責められた悲しさと罪悪感から、ついその場から逃げてしましました。

グチャグチャになつたプリンを残して。

「あの、どうしたんですか？」

庭の隅で途方にくれていると、背後から声が聞こえてきました。

「あ…プリンさん…」

「…」とこもれ。実は今日も、あのプリンのことでありますとありますて。それで…プリンはもう、陛下に…？」

についに笑つて、プリンさんが訊いたときでした。

彼の、プリンのように甘く優しい声と微笑みに、侍女は堪えていた涙が溢れてくるのを感じました。

「えー？ あ、あの…僕なにかいけないコトしました！？」

「…わ、私…取り返しのつかない」と…ツ…」

侍女が事の次第をポツポツと話しあると、プリンさんはニコニコ笑顔で言いました。

「そ、もう泣かないで下さい。プリンなら、また作ればいいだけです」

「でも…」

見上げた先には、プリンさんのホッとした表情がありました。

「それに、貴女のお陰で助かりました」

お城の厨房を借り、お城にある材料でプリンを作り直したプリンさんは、侍女と一緒に王様にそれを献上しました。

王様はその甘く優しい味に大満足。

侍女の顔にも笑みが戻り、そして隣のプリンさんを見ました。

『実はですね…あのプリン、塩と砂糖を間違えて入れてしまつたんですよ』

お約束なドジ話を照れ臭そつて呟くプリンさんの様子を思い出し、侍女は思わず声を出して笑つてしまひました。

その時、侍女と王様は思つたのです。

プリンさんのプリンがとても美味しいのは、材料のせいでも彼の技術のせいでもない。

“食べてくれた人を喜ばせたい”

その優しさこそが、美味しいの秘密なのだと。

どこかにある『最高の菓子店』にまつわる、

あま~い甘いプリンのお話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4820j/>

プリンさん物語

2010年10月15日02時30分発行